

- 2:1 それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。  
2 イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。  
3 ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません。」と言った。  
4 すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」  
5 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」  
6 さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。  
7 イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。  
8 イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところに行ってきなさい。」彼らは持って行った。  
9 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。それがどこから来たのか、知らなかった。しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた。彼は、花婿を呼んで、  
10 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」  
11 イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現わされた。それで、弟子たちはイエスを信じた。

福島島の片田舎で育った私にとって、海といえば太平洋でした。小学校4年の時、家族で新潟に行きました。その時に初めて見た日本海を私は今でも忘れることができません。海に着いたと言われ、海が大好きだった私は、早く海が見たくて、一目散に海の方に向かって走りました。でも、いざ眼下に広がる海を見た時、私の足はピタッと止まりました。ラムネ瓶の底の部分を敷き詰めたような、深くて暗い緑色の日本海の色は、太平洋しか知らなかった私にとって衝撃的な色でした。吸い込まれそうで、思わず後ずさりしたことを今でも覚えています。違うんだということを実感した貴重な体験でした。人生の中で初めての経験というものは、何であれ、その人にとって意味深いものです。

今日は、聖書の中に見る初めての体験、特にイエスの弟子ヨハネの初めての体験、そしてそれは同時にイエスさまにとっても初めての体験にもなりますが、そこから共に学んでいきたいと思いません。

この福音書は、まず始めにヨハネ自身がキリストについて解説した後、それを裏付けるバプテスマのヨハネの証言で始められています。ヨハネは、バプテスマのヨハネについてこう言っています。1章6～7節(読む)。「あかしのために来た」。そして19節から、そのバプテスマのヨハネ自身の証言が始まります。まずは自分自身について、バプテスマのヨハネはこう証言しています。20節(読む)。次によいよヨハネは、本命、イエス・キリストについて証言しています。29節を読みましょう(読む)。そしてそのイエスに洗礼を授けます。その時のことを32節でこう証言しています(読む)。そして、34節(読む)。「その翌日」バプテスマのヨハネは、二人の弟子と一緒にイエスさまを見ます。35,36節を読んでみましょう(読む)。今の今まで師と仰いでいたヨハネ先生が、イエスを見て「神の小羊」と言ったのです。この二人の弟子たちはヨハネの元を離れ、今度はそのイエスについて行くことにしたのです。

この二人の弟子のうち一人であるアンデレは自分の兄弟のペテロまでイエスさまの元に連れて来て、一緒に行くことになりました。そして43節。「その翌日」にはピリポとピリポに誘われたナタナエルという人物まで、イエスに同行することになりました。それから2日かけて、イエスと5人の弟子たちは、ガリラヤのカナめざして歩いていったのでした。以上が、今日の聖書箇所に至るイエス一行のざっと見た行程です。

それでは、2章1、2節を一緒に読んでみましょう(読む)。

2:1 それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。

2:2 イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。

3日目にやっと着いた時は、今まさに結婚の祝宴の真っ最中でした。1章43節を見ますと、イエスさまはちゃんと予定をもってガリラヤに行こうとされていたことがわかります。おそらく、この結婚式に出席するためだったのでしょう。しかもそこには、イエスの母マリヤが既に来ていました。おもしろいことに、1節を見ると、イエスの母マリヤの方には「いた」という表現が使われていて、2節のイエスの方には「招かれた」という表現が使われています。つまりこの結婚パーティーの正式な招待客はイエスで、イエスの母は、客というよりむしろ花婿か花嫁の関係者・身内として、この祝宴を陰にまわって手伝う立場にあったということがわかります。しかもここでは、弟子たちも一緒に客として招かれたように書いてありますが、この「招かれた」という言葉をよく見ると、招待の対象は一人だけ、つまりイエスさまだけで、他の5人の弟子たちは、その時たまたまイエスに付いて来ていたので「おまけ」として招かれたのだということになります。といっても、当時のユダヤ社会では、「接待」というのはとても神聖な務めでしたので、たとえ予定外の客であろうと、正式な客として何の差別もなくもてなされたはずです。またその当時、婚礼はその家だけではなく、一族は勿論、その町内全体で祝うお祭りのようなものでした。お祝いは数時間どころか、普通、一週間ほど続きました。家によっては二週間も延々と続くこともあったようです。とにかくにも結婚したての夫婦にとって、特に若い“主人”である花婿にとって、この祝宴をうまく盛り上げていくのが最初の大仕事であったわけです。お祝いに来て下さった客たちが十分に食べて飲めるだけの食料や飲み物が出されているか、みんなが楽しく踊れる音楽は誰に頼むか、スピーチは誰がいいか、出し物は誰にお願いするか、座の配置はどうするか...、準備することは山ほどありました。とても一人では仕切れません。そこで招待客の中から頼りになる何人か選んで、世話役になってもらい、座を盛り上げたり、出す料理をチェックしてもらったり、お客全体の様子に心を配って世話をして貰うのです。それが9節にある「宴会の世話役」です。また台所の方もてんてこ舞いです。この若夫婦の祝宴を陰で手伝ってやろうと、たくさんの手伝いの人たちがボランティアで近所から集まって来ています。それが5節に出てくる「手伝いの人たち」なのです。誰がどう動くのか、この人たちをまとめ、適切に指示するベテランが必要です。花婿は、これも昔からの知り合いの、気のおけないおばさんに頼んで、台所の方を見てもらったりします。それがマリヤ、つまりイエスのお母さんだったのでしょう。だからマリヤは始めから「いた」のです。そして家の長男であるイエスが正式な招待客として招かれたという訳です。言い伝えによると、父親のヨセフはイエスの小さい時に亡くなったと言われていてから、多分この時には、長男のイエスが母を助けながら家長として家を支えていたと思われます。こうして、弟子たちと共にごちそうを食べ、音楽や踊りに興じていたイエスでしたが、突然母親にこう言われます。

3節を読んでみましょう(読む)。

2:3 ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません。」と言った。

「ぶどう酒がありません。」正確には「ぶどう酒がなくなりかけています。」それがなんなの？と思われるかもしれませんが、ユダヤ社会ではこれは一大事でした。水の少ないユダヤでは、ぶどう酒が人々の主な飲み物でした。どんな家でもぶどう酒を切らすということは普通しません。それくらい余分に用意してあるものです。特に結婚パーティーのようなお祝いの席ではなおさらのことです。もしパーティーの途中にぶどう酒や料理がなくなってしまうたら、それはお祝いのために駆けつけてくれた客に対する侮辱であり、このパーティーの主催者である夫婦の不徳となって、大きな社会的な不名誉となってしまいます。特にここ、ガリラヤのカナのような小さい村では、“ダメ夫婦”という烙印が、これからここで新しい生活を始めようとする若夫婦に、多分一生つきまとうでしょう。この若夫婦にとって、これはまさに一大事でした。「このままでは、あの若夫婦たちが大恥をかく。」陰で手伝いをしていて、それにいち早く気づいたイエスの母マリヤは、すかさず、何のためらいもなく、それを息子イエスに言ったのでした。ここで疑問が生じます。どうしてマリヤはこのことをわざわざイエスに言ったのか？いろいろな論議が生じます。イエス一行こそが予定外の客だから早々に出て行ってもらおうとしたとか、わざとぶどう酒を少なめに準備しておいて、イエスに派手な奇跡を見せてもらおうとしたとか、カトリックに至っては、このイエスの母マリヤの一言から、偉大な最初の奇跡が起こった。やはり聖母のとりなしにこそ力がある、と。でも、母親って結構なんでも息子に話してしまうものではないでしょうか。別に解決して欲しいと思っているわけではなくとも、とりあえず話すということはないでしょうか。御主人の側でも、そんな奥さんの姿を横目で見ながら「全く女って何でも話すんだから。こんなこと息子に話してもしょうがないだろう。」と思いながら聞いていることはないでしょうか。特に一家を担っている信頼のおける息子にだったらなおさら、だと思えます。ましてやマリヤにとってイエスは特別でした。なにせ生まれる前から、生まれる時も、そしてその後も、不思議の連続でした。でもマリヤは、それら一つ一つすべて心に納め、思い巡らしていたと聖書には記録されています。そしてつい先日は洗礼を受け、今や息子を師と仰ぐ弟子たちを連れて帰って来たのです。それら一つ一つを考えた時、マリヤには一つの確信があったのではないのでしょうか。「イエスならなんとかしてくれる。助けてくれるに違いない。」だから、マリヤは問題を知った時、すかさずイエスのところに行ったのです。「ぶどう酒がなくなりかけています。」と。「事実を伝えさえすれば、イエスが一番良いように解決してくれるに違いない。」と。

それに対しイエスさまはどうお答えになったのでしょうか。4節を一緒に読んでみましょう(読む)。

2:4 すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」

何ともちぐはぐな、ちぐはぐどころか、冷たい、突き放した冷徹な答えのように思われます。「あなたは私と何の関係があるのでしょうか。女の方。」でも、よくよく読むと、これがまさにイエスの的を射た答えだったのです。「女の方」えっ！お母さんを「女」って呼ぶの？もしうちの息子が私を「ちょっとその女の人」なんて呼んだら、即「そこに座りなさい」「あんた何のつもり！」とお説教が始まったことでしょう。私たちが韓国でとてもお世話になった大学の教授との「女」にまつわるおもしろい話があります。野寺先生が初めてその先生と出会った時、その先生は「私は日本語ができます」とおっしゃって、本当にいろいろと私たちを助けて下さいました。ある時、私たち夫婦が先生と話しているところへ、弟子の女学生が来ました。その時、先生は得意の日本語でその学生を紹介して下さいました。「この女は～です。」「えっ！この女？！先生とこの学生はどんな関係？」先生はご自分では日本語ができるとおっしゃっていたのですが、私たちからすれば実はほとんどできなかったのです。それから私たち

はその先生に、女性に対して「この女」と言うことはどういう意味があるのか、よく説明しました。ですが、ここでイエスさまが使っている「女」という言葉は、聖書では「女の方」と表現されているように、決して母親を軽蔑した言い方ではないのです。「女王」や「高貴な人」に対して使うような、尊敬を含めた言葉なのです。非常に丁寧な、女性に対する呼び方なのです。とは言っても、母親を「女の方」と言ったのには、それなりの大切な理由があったわけです。それが「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。」という言葉です。「あなたが何を知り、何を期待しようと、それはあなたの考え。わたしは完全にわたしの考え通りにします。」「もはや、母親であるあなたの権威の下にはいません。」いかなれば母からの独立宣言です。「お母さん。あなたは尊敬する存在です。でも、わたしはもはやお母さんの権威の下で生きるのではなく、わたしの本来の使命に従って、つまり父なる神さまのみこころに従って生きます。」ということをはっきりと母親に知らせた一言だったのです。今からは地上の親の要望によってではなく、天の父の目的に従って行動する、というのです。また、「わたしの時はまだ来ていません。」と言っていますが、「わたしの時」というのは、ここヨハネの福音書では何度も出てきており、「キリストが十字架で死ぬ時」を意味します。つまり「わたしの時が来る」というのは、イコール「十字架の死へ向かって真っ直ぐに進んでいくメシア(救い主)としての公生涯が始まる」ということなのです。そしてその時を決めるのは、もはやお母さん、あなたではなく、天の父なる神であり、これからは、この神の栄光を現すために生きるのです。その時はまだ来ていません。というのです。

人の思う「時」と神の「時」が違うことは、私たちの人生の中で多々あります。そしてそれ故に失敗することの何と多いことでしょう。聖書の中にもこんな失敗があります。イザヤ書 30 章 15～17 節と一緒に読んでみましょう(読む)。

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。

あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。「私たちは早馬に乗って。」それなら、あなたがたの追っ手はなお速い。

ひとりのおどしによって千人が逃げ、五人のおどしによってあなたがたが逃げ、ついに、山の頂の旗ざお、丘の上の旗ぐらいしか残るまい。「神さまに立ち返って、じっと神の時を待っていれば、落ち着いて、神さまに信頼し続けてさえいれば助かるのに、先走ってしたばかりにあなたがたは滅びてしまった。」というのです。これは笑って済ませられる人ごとではありません。待つべき時にじっと待つことができずに、落ち着いてただ神さまだけに信頼しなければならぬ時に、ついつい勝手に動いてしまってとんだ失敗をしでかしてしまうことが何と多くあることでしょう。こんな時どうすればいいのでしょうか。今日のテキストに戻って、5 節を読んでみましょう(読む)。

2:5 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」

マリヤはイエスの答えを聞いて、自分の息子が自分の手から離れたことを知りました。もう自分がとやかくイエスに言う時ではないことをちゃんと悟ったのです。それでも彼女はイエスがこのことに関して、一番良いようにしてくれるだろうと期待していたのです。いや、一番良い解決を与えてくれることを知っていたのです。その「時」は、自分が思う「時」と違うかもしれない。でも、イエスは一番良い「時」に、一番良い解決を与えてくれる。たとえ母の手を離れても、いや、離れたからこそ、もっと自由に、イエスの持つ最大限の力を発揮して、必ず何かしてくれる、マリヤはこれまでの経験からイエス

をこう理解したのでしょうか。だからイエスにではなく、手伝いの人たちにこう言いました。「あの方が言われることを何でもしてあげて下さい。」「してあげて下さい」と、ここでは表現が軟らかく、命令というよりむしろお願いのように書いてありますが、この表現は、絶対的な命令、断固とした命令をする際に使われ、むしろ実際は「あの方が言われることは何でも、すぐに、何の疑問も挟まないで、その通りにしなさい。」という言い方になります。自分の「時」と神の「時」がずれた時、私たちのすべきことは、まずはもう一度神に立ち返って、神に信頼して、落ち着いて静かに神の「時」が来るのを待つことです。そしてその時が来たら、言われた通りにすぐに、何の疑いもせずに従うことなのです。さあ、私たちのできる準備は終わりました。あとは主の「時」が来ればいいのです。

6節を読みましょう(読む)。

2:6 さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。

「ユダヤ人のきよめのしきたり」というのは、外出から帰って来た時、そして食事の時の習慣ことを指しています。ユダヤ人は外を歩く時、革製のサンダルを履きます。ユダヤは乾燥地帯ですから、土埃のため足がよごれます。ですから帰宅時には必ずよごれた足を水で洗うのです。また食事する際には、その前に必ず手をきれいに洗います。1品食べるごとに洗っていたという記録も残っているほどです。ですから必ずどの家にも石の水ガメがありました。そしてほどなく、イエスの「時」が来ました。

7節を読みましょう(読む)。

2:7 イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。

イエスは手伝いの人たちに命じました。「水ガメに水を満たしなさい。」と。「満たしなさい」これもストレートで強い、権威を持った命令でした。「満たしなさい」とイエスに命じられた手伝いの人たちはどうしたのでしょうか。「満たした」のです。しかも縁まで一杯に、これ以上つぎ足す必要のないほど、これ以上何も入れられないほど、あきなく一杯にしたのです。手伝いの人たちはイエスの命令に素早く反応しました。しかも完全に、何の疑いも挟まず、文句も言わず、イエスの言う通りに、100%従ったのです。皆さん、一カメ 100 リットルとしたら六つあるから 600 リットルですよ。多少既に水が入っていたとしても、何人の手伝いの人か分かりませんが、井戸まで行っては水を汲んで来て、カメに入れるわけです。単純作業ですが、楽な仕事ではありません。でも彼らは何も言わず、即座に命令に従ったのです。見事です。

すると、次の命令が飛んできます。8節を読みましょう(読む)。

2:8 イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところに行って行きなさい。」彼らは持って行った。

「今汲んで、持って行きなさい。」やはり、手伝いの人たちはすぐにその命令の通りにしました。彼らは宴会の責任者、世話役のところに行って行ったのです。

そして9, 10節をご一緒に読みましょう(読む)。

2:9 宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。それがどこから来たのか、知らなかったのですが、しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた。彼は、花婿を呼んで、

2:10 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」

この場面を想像してみてください。世話役、花婿、手伝いの人たち、どの人に焦点をあてても、実

におもしろい場面ができあがると思います。では順を追って見てみましょう。おもしろい流れがあります。7節でイエスさまは「水を」満たしなさいと命じて、手伝いの人たちは「水を」満たしたと、どちらにも「水を」と明確に書いてあるのですが、8節の「汲んで」「持って行きなさい」という命令の中には、何の目的語も書かれていないのです。つまり汲んで持って行ったものが「水」であるのか「ぶどう酒になったもの」なのか書かれていないのです。そして9節には世話役が味わったものが「ぶどう酒になった水」であることが記されています。しかも「ぶどう酒になった」の「なった」という言葉は、一度ぶどう酒になったが、その後もずっとぶどう酒のまま、つまり完全にぶどう酒になってしまったという意味の形が使われています。カメに入れた時は完全に水であったものが、世話役の口に入った時には完全にぶどう酒だったというのです。この経過を何も知らずに味わった世話役は、あまりのおいしさにただビックリ！何が起こったのか、どういう訳なのか、さっぱり理解できませんでした。が、一方、飲んではいけないけれども、イエスの命令に従って水を汲み続けた、つまり自らの体を使って、自分を犠牲にして手伝った者たちはこの顛末を十分に理解していたのです。明確なコントラストがここにあります。表舞台には立っていませんが、ただ黙々とイエスに従った者は、そこでイエスのみわざを見ることができました。でもイエスがいても我関せずで、この世のことに一生懸命気を配っていた人たちは、いくらその恵みを味わっても、そこにイエスを見いだすことはできなかったのです。

ぶどう酒になった水を味わった世話役は、驚いて、総元締めである花婿を呼んでこう言います。「普通なら、最初はよいぶどう酒を出すけど、酔っぱらってきて味の見分けがつかなくなってくる頃には、安くて質の悪いぶどう酒を出すものなのに、あなたは今までよくもこんなによりぶどう酒をとっておいたね。」この賛辞をもってこの話は幕を閉じます。多分一番驚いているだろう花婿の反応やその後の人々の様子も、すごいものをこの目で見た手伝いの者たちの興奮した反応も、マリヤの様子も何も書かれてはいません。そして意外や意外、こう締めくくられているのです。

11節を読みましょう(読む)。

2:11 イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現わされた。それで、弟子たちはイエスを信じた。

これが、数々の不思議な力あるしるしを行って来たイエスの“最初のしるし事件”の顛末です。「しるし」というのは、ただ単に常識では考えられない奇跡を指しているではありません。「しるし」という言葉を使う時、それは、最も強烈に、確かに、イエスが神であることを指し示すできごとに対して用いられます。それは単なる驚きをもたらすものではなく、人の心の奥底から、魂からイエスは確かに神であるということを示すものなのです。そうしてイエスはご自分の栄光を現されました。その結果、イエスについて来た5人の弟子たちがイエスを信じたというのです。あれっ？この弟子たちはイエスさまを信じてついて来たのではなかったのでしょうか？はい、彼らは確かにイエスさまを信じてついて来たのです。1章38節では「ラビ」と信じていました。41節では「メシヤ」と信じていました。45節では「モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました」と告白しています。49節では「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」と告白しています。2章2節で使われている「弟子」という言葉は、「従う人、味方、支持者」を意味しています。つまり、師と仰ぐ人の教えを受け入れ、それを自分のルール、規準にする人、自分の先生のスピリットを真剣に吸収してこうとする人が「弟子」なのです。そしてこの5人の弟子たちはその「弟子」と認められたものの、その歩みを始めたばかりなのです。その入門者5人に対して、イエスさまは今回のしるしを通して、ご自分の本当の姿をお現しになったのでした。愛する母にどんなに言われようと、イエスは「しるし」をなさる

うとはしませんでした。花婿花嫁がどんなに困っていようと、それだけでイエスは「しるし」をしようとはなさいませんでした。ましてや飲めや歌えやで騒いでいる客たちを楽しませるために「しるし」をなさったのでもありませんでした。「それで弟子たちはイエスを信じた。」この婚礼ではおまけでしかなかった弟子たち、でもイエスを「先生」、「メシヤ」、「神の子」と信じてついて来た弟子たちのために、イエスはこの「しるし」を彼らの師として、メシヤとして行ったのでした。「弟子」といってもまだまだ駆け出しの初心者、入門したばかりのほとんど何もわからない者たちです。でも「弟子」としてイエスさまは受け入れられました。そしてその弟子たちのために、イエスさまはご自分の力を、神の子としての力をお見せになったのです。しかも他のしるしには類を見ないような方法で。つまり、言葉を発することもなく、触れることもなく、ただ意志しただけで、水をぶどう酒に変えられたのです。まさに何も無いところからこの世を創造された神の力です。この「しるし」こそ、イエスが神の子、救い主であることの証明としては完全なものでした。だからこそ、このことがご自分の栄光を現すものとなったのです。この最後の部分に至るまで、2節で弟子たちがイエスと一緒に婚礼に出たという以外、弟子たちの様子は一つもわかりません。でも、このできごとを通して、何もわからないけれどもイエスを師と信じてついて来た弟子たちは、イエスを師として、神の子として、救い主としてますます強い確信をもって、信仰を持って、ついて行くこととなります。イエスさまとはこういうお方なのです。イエスさまが見ておられるのは、たとえどんなに小さな信仰でも、ご自分を師として、救い主として、神の子として信じてついて行こうとしている者たちなのです。そして偉大なしるしをなさるのも、危なかしい足取りで必死で自分について来る弟子たちを強くするため、成長させるためなのです。世話役や花婿、手伝いの人たちのように、そのおこぼれにあずかる人たちはいるかもしれません。今回のように、イエスの命令にひたすら従った手伝いの人たちはすばらしい恵みを受けました。主のみわざを直接見ることができたのですから。そればかりかそれに自ら関わることができたのですから。でもあくまでもその恵みの対象は、イエスさまが関心を寄せていらしたのは、イエスについていこうとしている弟子だったのです。ヨハネの福音書 17 章 24 節にこんなみことばがあります(読む)。

父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

「あなたがわたしに下さったもの～つまりイエスを信じる者たち～をわたしのいる所に一緒にいるようにして下さることを、わたしは意志します。わたしは望んでいます。」とイエスさまはおっしゃいます。イエスさまは完全な弟子、強い弟子、信仰深い弟子だけを見ているのではないのです。失敗ばかりしているけど、一生懸命師であるイエスさまの言う通りに生きようとしている人。信じたばかりでまだ何も知らないから、もっともっとイエスさまから教わりたい思っている人。今初めてイエスさまと出会って、この人は何か違う、ついて行ってもっとこの人と向き合いたい、深く知りたい思っている人のことも、イエスさまはちゃんと見ていて下さって、ついてくることをお許しになって、ベストタイミングで神の子、救い主イエス・キリストの力を見せて下さるのです。そうして一人一人キリストの弟子として成長させて下さるのです。ある時は弟子の立場でイエスのみわざを見るでしょう。でもある時は、手伝いの人々の立場でイエスのみわざを手伝うかもしれません。でも、主についていこうとしないと、主の働きがいつでもできるよう、主のお声がかかった時いつでも従える準備ができていないと、私たちは同じ現場にいながら、たとえその恵みにあずかっておいしいぶどう酒を飲むことができたとしても、肝心の神の子としての力を見ることはできなくなってしまうのです。世話役や花婿、他の客たちのように。

1章 35 節に出て来る二人の弟子の一人はアンデレ、もう一人はこの福音書を書いたヨハネだと言われています。即ちヨハネは、イエスの弟子として、この時キリストの御力を見た一人です。最初は何も知らないまま、ただ師であったバプテスマのヨハネがイエスを見て「神の小羊」と言ったのを聞いて、ただそれだけでイエスについて来た弟子だったのです。それでもイエスさまはついて来ることをお許しになって、そんなヨハネを「弟子」と呼んで下さったのです。でも、このできごとを通して、より一歩信仰が強められた弟子でした。イエスさまと共に生活しながら、時にはイエスに背きながら、そしてその度にイエスが手を差し伸べて助け、ある時は叱責して、ご自分の救い主としての姿を、神の子としての姿を弟子たちに現し続け、弟子たちも、それでも絶えず神の子、救い主としての姿を見つけてきました。そうしてヨハネは、最後までイエスを救い主として信じ続けることができたのです。どんなに迫害されても伝道し続けるので、最後は人っ子一人いないパトモスという島に流されてしまいました。でも、終わりではなかったのです。ある日突然、神さまから世の終わりのさまを特別に見せていただき、黙示録を書きました。また何通も手紙を書いて信徒たちを励まし、また、イエスさまの生涯を福音書という形で書き残しました。偉大な信仰者の一人です。でも、そんなヨハネに成長させた第一歩は、このできごとにあったのです。神さまの方から手をさしのべて下さって、ご自分を自ら現して下さって、弱い私たちの信仰を励まそうとしておられるのです。従おうとする者たちを見捨てずに、成長させようとしておられるのです。神さまは、ヨハネたちに見せたしるしを私たちにも見せて下さって、私たちの信仰を成長させて下さいます。実は今も、この瞬間も神さまは私たちにご自分を現して下さっているかもしれません。さあ、皆さん。心の目を開いて、主を待ち望みましょう。心を静かに主に向けましょう。私たちはただ神さまを信じて、今自分の持てる限りの力で、主を信じて、主に従っていけばいいのです。神さまは確かに私たちを見ていて下さって、私たちにとって一番良い方法で、私たちにご自分の栄光を見せて下さいます。私たちの小さな信仰を励まし、成長させて下さるのです。だから私たちはそれを素直に信じて、ただひたすら「わたしについて来なさい。」と声をかけて下さるイエスさまを見失わないようにして、イエスさまに従い続けていこうではありませんか。

祈ります。

イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現わされた。それで、弟子たちはイエスを信じた。

いつも私たちを見ていて下さり、最善に導いて下さる神さま。

こんな小さい者に目をとめて下さり、こんなにつまづきの多い者に「わたしに従いなさい」とお声をかけ続けて下さり、罪の中で押しつぶされそうになってもがいていた私に手を差し伸べて引き上げて下さり、ついて来ることを許して下さるあなたの深い御愛に心から感謝します。

そんな私たち一人一人にふさわしいやり方で、私たちにあなたの御力を、御愛を、あなたご自身を見せて下さり、その度に私たちの信仰を励まし、強めて下さいました。そんな懐の深いあなたをただ崇めるばかりです。

これからも日々あなたに従っていきたくと切に願います。

もっともっと成長したいと願います。

何があっても動じない強い信仰を持ちたいと切望します。

どうか日毎にあなたの御顔を仰がせて下さり、あなたのみわざを見せて下さって、私たちを成長させて下さい。

何にも屈しない信仰をお与え下さい。



悪魔の誘惑に打ち勝つ力をお与え下さい。

そして私たち自身が神の栄光を現す者として、この世で輝いて生きていけるように、力を 下さい。

そしていつの日か天の御国で、あなたから義の栄冠をいただける者とならせて下さい。

イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。